

## 埴谷雄高蔵書の生前寄附分の行方

水沢 不二夫

吉本隆明は「埴谷雄高はおれの寄贈本を売り飛ばしちやつたんだぜ」〔情況への発註<sup>註1</sup>1984(S59). 11「試行」63号〕と怒り、埴谷雄高は、

私を触発しないだろうと私が勝手に思っている本の一部は、確かに、売り飛ばしており、また、残る他方の部分は、古い農民運動時の友人が、町田市の奥の鶴川といったところで私立の図書館を開いているので、そこへ寄附しております。この寄附は、千数百点ですけど、売り飛ばす本より多くいつているでしょう。（「政治と文学」1985(S60). 2〔海燕1〕）

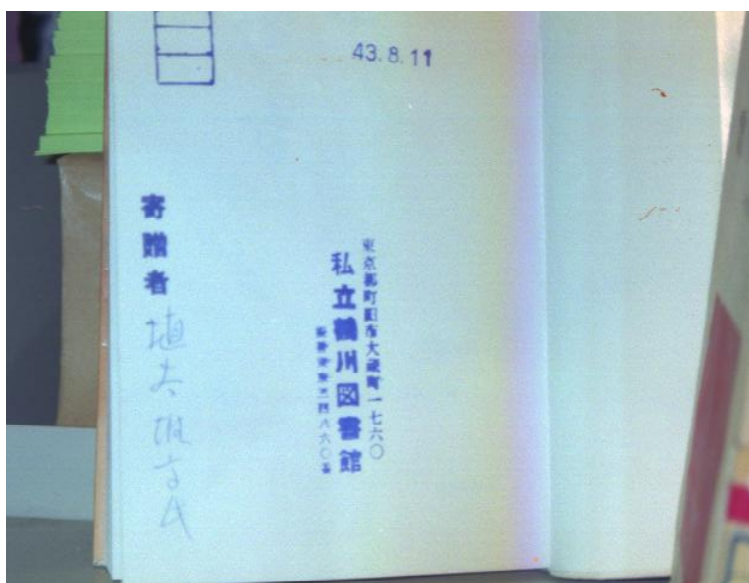
と述べた。これは埴谷・吉本論争のなかでの発言であるが、本稿ではこの寄附された蔵書の行方を確認できたので、ここに報告する。

埴谷の言う「古い農民運動時の友人」とは、浪江虔（なみえ・けん）<sup>註2</sup>のことである。浪江は一九三九（昭和一四）年に農村の文化の向上のために「私立南多摩農村図書館」（現、東京都町田市大蔵町<sup>1760</sup>）を開設した。しかし、同年九月、共産党のフラクションとなり、オルグ活動で検挙された。一九三五（昭和一〇）年には執行猶予で出獄するが、一九三九（昭和一四）年、実兄の板谷敬の京浜共産主義グループ事件の巻き添えを受けた。治安維持法で検挙され、懲役二年六ヶ月の実刑となる。そして、一九四四（昭和一九）年に刑期を終

えて、戦時下に細々と図書館を再開した。一九六八（昭和四三）年には「私立鶴川図書館」へと改称し、一九八九（平成元）年の閉館まで足かけ五〇年の活動を成した。閉館は、浪江らが市民側から行政に働きかけて実現した「町田中央図書館」の一九九〇（平成二）年の開館に伴ってのものであった。浪江の蔵書の殆どは町田市立図書館に寄贈された。（<sup>452</sup>冊は「農文協図書館」に寄贈されたが、目録には農業の専門書ばかりが並んでいるので、埴谷の寄贈分とは無関係と思われる。）

浪江は寄贈された本については『台帳』（町田中央図書館蔵）に記録していたが、これには寄贈者の記載はない。寄贈者は現物の本の見開きまたはその近辺に記してある（写真①）。但し、寄贈者に献本として著者の署名を入れられたものは、寄贈者が誰であるか分からないように宛名を切り取ってあり（写真②）、寄贈者を探ることはできない。埴谷の他に、鶴見俊輔や岩波雄二郎、佐多稲子などの名が見える。また、浪江の意向で多くは一般図書とともに配架されており、埴谷の寄贈の全ての分をリスト化することは残念ながら困難であるが、埴谷雄高の社会活動の一側面を示す資料であるには違いない。埴谷の作品にはいわゆる農民文学的要素は無いが、それ故に逆になぜ無いのかという問題も浮上する。今後の課題であろう。

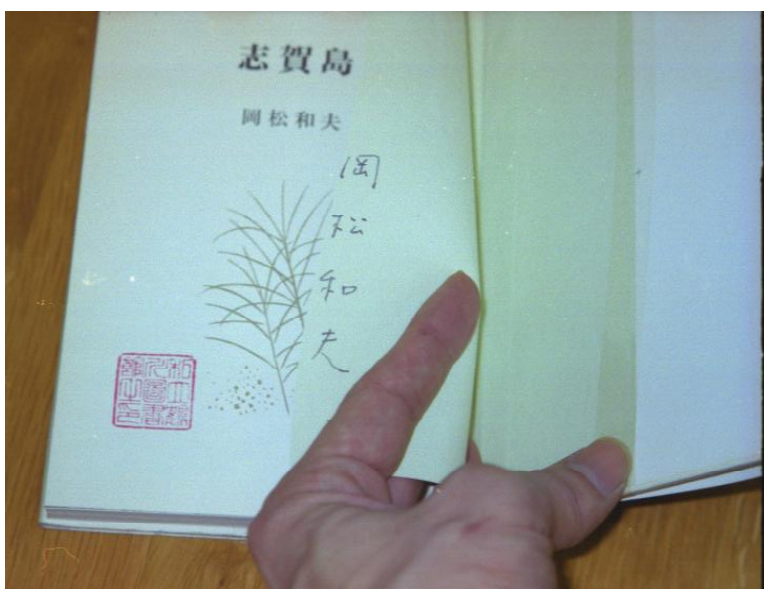
【写真①】開高健『ずばり東京(下)』 一九六四年 朝日新聞社  
 (「寄贈者」のスタンプの下に手書きで「埴谷雄高氏」とある)



注一 埴谷雄高「浪江虔君におくる」に拠れば農民運動時に近い部署にいたことが知られる。なお、この文章は初出不明、全集未収録で、浪江の遺品として町田市が所蔵している。

注二 『特高月報』一九三三(昭和八)年十二月分による。なお、同資料の一九三二(昭和七)年五月分の「治安維持法違反起訴調六八名」に拠れば、埴谷雄高の検挙は三月二十六日で、起訴は五月

【写真②】岡松和夫『志賀島』 一九七六年 文芸春秋社  
 (署名のすぐ左側で切り取られているため次頁が見える。)



十三日である。

付記 本資料の調査にあたり、町田中央図書館の守谷信二氏の協力を得た。この場を借りて感謝申し上げておきたい。

(本学非常勤講師 みずさわ・ふじお)